

「坊つちやん」とステイーブンソン「ファレサアの浜」

—「調子を学んだ」ことをめぐって—

レオン・ユット・モイ

はじめに

「坊つちやん」は、一九〇六（明治三九）年四月『ホトトギス』に掲載されて以来、ちょうど百年が経った今日も読者を魅了し続けている。「坊つちやん」は漱石初期作品群の中で、「吾輩は猫である」と同様に滑稽味があふれ、漱石文学においてもはや不動の評価を得た作品である。「坊つちやん」についての先行研究は、既に様々な角度から作品分析が行われてきている。『坊つちやん』程、そのモデルが問題にされた作品はないかもしれない。（中略）もし『坊つちやん』にモデルがあるとすれば、そのモデルは、すべて漱石自身であった¹⁾と小宮豊隆氏が指摘しているように、「坊つちやん」についての考察は作品のモデル問題をめぐるものが多い。また、主人公坊つちやんの女性観や清との関係、坊つちやんと作者漱石の家庭関係の重なり、坊つちやんの江戸っ子意識・学歴、作品の語りや登場人物の構造問題等について作家論・作品論の視点から研究されてきた。今後は、作品についての新たな分析とともに、作品の原点にも注目する必要があると思われる。

周知のように、「坊つちやん」は漱石が一八九五年四月から翌年四

月までの一年間、愛媛県尋常中学校で英語教師の経験から得た構想によって書かれた作品である。しかし、構想・構成上、本当に漱石自らの体験しか生かされないのだろうか。愛媛県尋常中学校の教職から「坊つちやん」執筆までおよそ十年の歳月がある。「坊つちやん」の出現は純粹に過去の記憶が蘇生しただけなのか。本論では、主に漱石の発言を踏まえて作品の構想の原点に遡り、「坊つちやん」の成立事情を検証したい。英文学者である漱石にとつての、外国文学、特に英文学とのかかわりに関しては、色々な角度から考察を行う価値があると考えられるからである。論者は、その一つの試みとして、従来の漱石研究において論じられていない「坊つちやん」とステイーブンソンの「ファレサアの浜」との比較を行っているところである。比較研究の最初として、漱石の発言を踏まえながら、両作の共通点を探ることによって、「坊つちやん」が「ファレサアの浜」から何を習い、何を摂取したのか、二作の連続性を明らかにしたい。

—「アラビヤナイト、エンターテイメント」の謎

「坊つちやん」と外国文学・英文学との関係についての先行論はそ

れほど多くはない。「坊つちやん」の発表当時に、「坊つちやん」とフランスのアルフランス・ドーデーの名作『ちび』の一部分が似ているという指摘がなされたのははじめ、近年は、デイケンズの『デイヴィッド・コッパフィールド』『ニコラス・ニッケルビー』、シェイクスピアの『ベニスの商人』、シャーロット・ブロンテの『教授』、メレディスの『サンドラ・ペロニ』が「坊つちやん」とのかかわりが指摘されてきた。⁶²

ところで、「坊つちやん」が発表されたまもなく、『国民新聞』の記者であった篠原温亭が漱石を訪ねて、漱石の談話をとり、「坊つちやん」の著者」と題して、一九〇六年八月三十一日の『国民新聞』⁶³に掲載した。この中で、漱石は「坊つちやん」の発想と外国文学とのかかわりについて、英文作家ステイーブンソンの名と「アラビヤナイト、エンターテイメント」という作品名をあげている。

「坊つちやん」ですか、腹案は有たといふ次第でも有ません、さやう三日計り前に不意と浮んでするくと書て了つたんです、と彼は矢張り玉火屋を打眺めて語りつ、けたが此時ハタと膝を打つて、さうでした、ウンさうだ、スチーヴンソンの「アラビヤナイト、エンターテイメント」です、之から思ひ付たんです、第一人称で書て英語も大部変つてゐる、此に習ふならペランメー言葉でなくちや可けない、悪棍が居て色々なこともしますがね、其のママ調子です、調子を学んだといへば言ふんです、一例をいふと鉄砲を昇いで両方から一本道を歩つて来るものがある、行合ふて双方立止る、何故人の前に立つかといふと一方も何故人の前に立つかといふ、貴様避けといふと、貴様避けといつたやうな塩梅、其人自身が滑稽に出来て居る、決して拵へたものでない、結構は「坊つちやん」より簡単です、人物も那様に沢山出て来ません、けれども之から脱化したとは誰も気づくまい、只だ調子文ですからね

大屋幸世氏は「坊つちやん」の著者の新聞記事を翻刻し、「坊つちやん」の著者——当時の新聞記事から——と題して、注を付けている。「文中「アラビヤナイト、エンターテイメント」とあるのは、『New Arabian Nights』ではなく、『Island Nights' Entertainments』の聞き誤りであろう」と、大屋氏は注にて記者の誤記だと指摘している。論者も作品の題名や内容を確認してみたが、「アラビヤナイト、エンターテイメント」という作品は存在しない。記者はステイーブンソンの『New Arabian Nights』"Island Nights' Entertainment"の二作品から、存在しない作品『Arabian Entertainment』と誤記してしまったのである。大屋氏はこの誤りを指摘した最初の研究者であろう。伊藤整・荒正人著『漱石研究年表』⁶⁴と後年の荒正人著『漱石研究年表 増補改訂』⁶⁵でも大屋氏の注を引用している。

大屋氏が推定したように、ステイーブンソンの作品群の中で最も「坊つちやん」に近似し、共通する要素を持つのは、『Island Nights' Entertainments』（『南海千一夜物語』）であると論者も考える。ところが、この両作の詳細な考察はいまだなされていないのである。以下、「坊つちやん」と『Island Nights' Entertainments』の二作の比較検討を行つていきたい。

——ステイーブンソンと『南海千一夜物語』

ロバート・ルイス・ステイーブンソンは一八五〇年十一月十三日スコットランドの首都エジンバラで生まれた。体が羸弱だったが、精神

面では、「ステイブソン家から受け継いだスコットランド人の憂鬱な気質、誠実さ、率直さとは相容れないかれの陽気さと反逆性」が見られた。彼を一躍有名にした「Treasure Island」（『宝島』）は、一八八三年に発表された。そして、一八八六年の「Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde」（『ジキル博士とハイド氏』）は、彼の名声を決定的なものにした。

一八八八年三十八歳のステイブソンは、家族を連れて太平洋の島々ハワイ、サモアなどを巡る旅に出た。死ぬ日までサモアに定住し、幾篇もの南海外物を完成させた。一八九三年に出版された「Island Nights Entertainments」（『南海千一夜物語』）もこの時期に完成された。南洋に来てから六年目の一八九四年に脳溢血で倒れ、わずか四十四歳で亡くなる。遺体はサモアに葬られ、墓にサモア語で「物語りの君の墓」と刻まれた。

前述したように、ステイブソンの作品群の中で最も「坊つちやん」に近似し、共通する要素を持つのは、「Island Nights Entertainments」（『南海千一夜物語』）である。この作品はステイブソンの最後から二番目の作品であり、「ファレサアの浜」「瓶の妖鬼」「声のする島」の三篇の話から成り立っている。三篇はそれぞれ独立した話であるが、舞台は同様に未開の南洋の島と設定されている。「ファレサアの浜」の一番重要な主人公は白人だが、「瓶の妖鬼」「声のする島」の主人公は島民である。三篇の中で、「坊つちやん」との類似点が多く見られるのは「The Beach of Falcsa」（『ファレサアの浜』）である。以下、その概略を紹介しよう。

一―二 「ファレサアの浜」の概略

第一章 「南海の婚宴」

ウルトシヤは、すでに白人（イギリス・フランス人）が住んでいる南洋の島に商売のため到着した。そこで、地元の女性ウマとの結婚をケイスという男に勧められた。ケイスは、英語も地元の言葉も話せ、「生れが良く、立派な教育がある事は確かだった」が、小柄で肌が黄色つぼく、国籍も分からなかった。ウルトシヤはケイスと仲良くして行きたかった。ウルトシヤはウマと結婚し、「該ジョン・ウルトシヤ氏はいつ何時たりともウマを遺棄する自由を有する。」と英語で書かれた結婚証書が彼女に渡された。砕けた英語しか話せないウマは、この結婚証書を天国に行くための通行証のようにとでも大事に保管していた。

第二章 「交際禁止」

ウマと結婚した後、ウルトシヤは、島民が彼のいる場所へ近寄りたがらないことに気付いた。これについて彼はケイスに尋ねたが、ケイスは知らぬ顔をした。ケイスには何らかの陰謀があるのではないかとウルトシヤは疑った。ある日、彼はフランス人のタールトン宣教師に出会い、ケイスの悪行を初めて耳にした。実は、ウマと母親は島民に排斥されており、ケイスはウルトシヤを困らせるためにわざと何も教えず、ウマとの結婚を勧めたのだった。従って、ウマと結婚しているウルトシヤのところには島民たちは近寄りたがらない。この真

相を知った後、ウルトシヤはケイスと仲が悪くなった。

第三章 「宣教師」

ウルトシヤはケイスと喧嘩した後、一人の宣教師に出会った。ウマと結婚している限り自分は商売できないことを覚悟した上で、ウマを永遠の妻とするために、彼女と正式に結婚したいことや、結婚式の証人になって欲しいことを、ウルトシヤは宣教師に告げた。そして、ウマの大事にしていた結婚証書を彼女の目の前で千切った。

第四章 「妖術」

悪霊が出るため島民が藪の中に近寄らないことを知ったウルトシヤの藪の中への探検譚。実はこれはケイスの仕業で、迷信深い島民を怖がらせる仕掛けであったが、ウルトシヤはそれを見破った。

第五章 「叢林の一夜」

ウルトシヤはある夜爆弾を持って再び藪に入り、ケイスの仕掛けを破壊しようとした。ケイスがそれを知って、銃を持って藪の中に入った。そのことを夫に知らせるために、ウマも藪の中に入った。仕掛けが破壊され、ウルトシヤ夫婦はケイスに射撃されたが、最後にケイスはウルトシヤにナイフで殺された。幸い夫婦とも死に至らなかったが、ウルトシヤは事件で脚に障害をおった。結局、ウルトシヤはイギリスに戻らず、ウマや子供たちと一緒に島で暮らし続けた。

二 ステイーブソンの愛読者漱石と「ファレサアの浜」

漱石とステイーブソンとの影響関係について、先行研究においてよく論じられるのは、「彼岸過迄」とステイーブソンの『New Arabian Nights』(『新アラビア夜話』)である。漱石が『国民新聞』でステイーブソンの作品名をあげたにもかかわらず、「坊つちやん」とステイーブソンとのかわり、特に「ファレサアの浜」との影響関係を考察する先行論は先述した大屋幸世氏の指摘を除き、管見ではない。そこで、当該記事に基づいて改めて「坊つちやん」を分析していきたい。

「彼岸過迄」に影響を及ぼす以前に、すでにステイーブソンの影響は「坊つちやん」に見られる。さらに、「坊つちやん」より先に発表された「吾輩は猫である」にもステイーブソンの名や作品名(「自殺クラブ」)が見られる。漱石がステイーブソンの作品を愛読していたことは彼の色々な談話や文章からうかがい知れる。談話「予の愛読書」において、ずばり「西洋ではスチヴンソン (Stevenson) の文が一番好きだ」と漱石が率直に語っているのは印象的である。その他、「余が文章に裨益せし書籍」(『文章世界』一九〇六・三三)、「夏目漱石氏文学談」(『早稲田文学』一九〇六・八)、「独歩氏の作に低徊趣味あり」(『新潮』一九〇八・七)、「小説に用ふる天然」(『国民新聞』一九〇九・一)、「思ひ出す事など」(『朝日新聞』一九一〇・一〇)、「一九一〇・一二」や日記・断片などにおいても、ステイーブソンについての言及が散見される。漱石山房蔵書目録における、ステイーブソンの作品の数も、漱石のステイーブソン愛読の証拠となるだろう。小玉晃一氏は「漱石とステイーブソン」¹⁰⁾においてこのように述べている。

ステイブソンの作品は、その英文学関係の洋書六四〇点の蔵書中十四点を占め、それはスコット十六点、シェイクスピア十二点、ミルトン十点、G・エリオット九点という数字から見ても、その傾倒ぶりがわかる。

蔵書目録には、小玉氏が取り上げたほかには、オーステイン四点、「余が文章に裨益せし書籍」にて「自分が好きな作家をいへば、英文ではスチブソン、キツプリング、其の他近代の作家である。」と名があげられているキツプリング八点が見られる。漱石が文章や談話で言及したことがあるポー(二点)、ホイットマン(一点)、テニス(六点)、メレディス(四点)も見られるが、ステイブソンの十三点と比べると、遥かに少ない。漱石が、ステイブソンの作品を愛読しているのが明らかである。

『南海千一夜物語』は漱石山房蔵書目録に入っていないが、漱石の教子である鶴見祐輔は、一九〇六年九月中旬、第一高等学校英法科三年生として漱石の講義を受け、「一高の夏目先生⁽¹⁾」において、次のように述べている。

その教科書といふのは、ロバート・ルイ・ステイブソンの、ゼ・アイランド・ナイト・エンターテインメントであつた。あの洗練し切つたステイブソンの文章を、夏目先生からならつたのであるから、自分たちは、すっかり魅せられてしまつた。幼稚な南国の島に棲む土人たちの、奇異な生活と、自然の描写とが、深い印象を自分たちに与へた。自分は熱帯地に対する憧憬を、どの位この一巻の書から受けたか知れない。(中略)丁度、その時分、先生の傑作、坊ちやん、が中央公論で発表された。あの坊ちやんの中に、坊ちやんが相手の野だに、喧嘩して卵子を

ぶつけるところがある。それを見て、前述の小説家になつたMが、『先生、あの卵合戦は、この本の話と似てゐますね』と教場で、だしぬけにやつた。

すると先生が、済ました顔をして、

『うん、あれは、この本から剽窃したんだよ。しかし、それを知つてゐるのは、君達ばかりだから、言つちやいかんよ』

と言つた。この本といふのは、初に記した我々の教科書ゼ・アイランド・ナイト・エンターテインメントである。あのうちに、花火仕掛と卵の滑稽な大喧嘩があるのだ。

漱石の発言は多少冗談のようにも思えるが、『南海千一夜物語』を教科書として活用していることから、漱石がステイブソンのこの作品をよく知り、英語の原文を細かく読んだのは間違いないだろう。ただし、卵合戦については、ステイブソンの作品ではない。小宮豊隆氏は「夏目漱石を語る」^(1,2)(座談会)において、「先生が、実はあれは僕のオリジナルな工夫ぢやない。メレディスの小説に馬鈴薯を籠に入れてあるいてゐた男が喧嘩をして、相手にその籠の馬鈴薯をぶつけるところが書いてあるのを、ああいふふうにご利用したままである」と語っている。漱石が言及したメレディスの小説は、『サンドラ・ペロニ』である。

小宮豊隆氏の推定によれば、漱石が「坊つちやん」を執筆したのは、一九〇六年三月十七日から同月二十三日までの七日間である。江藤淳氏は、当時の原稿用紙を四百字詰換算すれば、漱石は一日およそ二十枚〜三十枚の猛スピードで「坊つちやん」を書き上げたという。また、このことについて、江藤氏は『坊つちやんについて』^(1,3)(初出一九七九年九月)において次のように述べている。

いずれにしても、このような執筆状況を一瞥すれば、『坊つちやん』の最大の魅力となつて全編を支えているのが、一気呵成な創造力の奔出から生れた歯切れのよい文体のリズムであることは、まず議論の余地があるまい。その証拠に、もともと全体を通じて異例に消しや直しの少ない『坊つちやん』の原稿のなかには、ほとんど彫琢の跡をとどめぬ箇所が一、二にとどまらない。(中略)その言葉は、ほかの誰の言葉でもない漱石の生得の言葉である。つまりそれは酔平たる江戸弁である。排他的で、リズムカルで、やや軽佻浮薄な趣きがなくもない江戸ッ子弁。

非常に速いペースで「坊つちやん」を完成できたのは、江藤氏が述べるように、確かに漱石が自分の馴染んでいる「江戸弁」を使つたからであろう。それとともに、彼自身の中で、「坊つちやん」の構想をすでによく把握していたからでもないだろうか。つまり、先述したように、松山での教職体験を「坊つちやん」に生かしながら、一高で教科書として使つた「ファレサアの浜」の物語の特徴と、自分の馴染みの言葉である「江戸弁」を採用したため、推敲する必要もなく、驚異的な速度で創作を進ませて「坊つちやん」を脱稿したのである。言い換えれば、彼の胸中で、「ファレサアの浜」に習うならば、「ペランメー」言葉でなくちや可けない」という覚悟があつた。また、物語の内容のあんばい、人物の造型、出来事の持ち上がり、構造上の諸点を知り尽くしていたため、事細かに推敲するための時間が省かれ、毎日二十枚、三十枚の驚くべき成果を見せたのではないだろうか。

三 「坊つちやん」と「ファレサアの浜」に見られる共通性

東洋の学校物語「坊つちやん」と西洋の作家が書いた南洋物「ファレサアの浜」は一見まったく違う方向の作品だが、両作には何らかの連続性が感じられる。「西洋ではスチヴンソン (Stevenson) の文が一番好きだ」というように、ステイーブンソンの愛読者である漱石が、「坊つちやん」において、ステイーブンソンの作品、特に「ファレサアの浜」から何を摂取したのだろうか。「第一人称で書て英語も大部変つてゐる、此に習ふならペランメー言葉でなくちや可けない、悪棍が居て色々なこともしますがね、其のマア調子ですな、調子を学んだといへば言ふんです」という彼の発言から、この東西の二つの物語に見られる共通性を明らかにしたい。漱石の発言の順に語り手・言葉・プロット・人物設定などの共通性を考察していこう。

三―一 語り手

漱石の『国民新聞』で「第一人称で書いて」と発言したように、「ファレサアの浜」の語り手ウィルトシヤは第一人称の「I」であり、「坊つちやん」の語り手坊つちやんも第一人称の「おれ」である。また、両作の語り手とも男性の主人公である。

三―二 言葉

「英語も大部変つてゐる、此に習ふならペランメー言葉でなくちや可けない」というように、「ファレサアの浜」において、英語の分からない原住民の発する言葉だけでなく、白人が原住民と会話するとき

に、わざと文法の正しい英語を使わず、相手にあわせて碎けた、文法の間違っている文章は多く見られる。原住民によって黒人発音の綴りがあり、「視覚方言」が使われ、話し手の無教養などを表している。

「視覚方言」とは、文学作品で標準的な綴り字ではなく、発音通りに綴ったもので、つまり作中の人物が非標準的な発音をしていることを視覚的に明示する綴り字であり、話し手の無教養などを表すのに用いられている。

第四章「妖術」で、ウィルトシヤが島の者にケイスの顔を見たかと質問する場面において、島の者から発する視覚方言が見られる。例えば、標準英語の *sir* (貴君) (*sɜ:(r)*) は *sah* (*sə*) と発音し、*ostreperous* (下等な煩さ) (*ɒstɪpərəs*) は *ostropulous* (*ɒstrɒpjʊləs*) と発音する。

地の文においては、スコットランド出身のステイーブンソンはスコットランド訛りを使っている。第一章「南海の婚宴」と第二章「交際禁止」で、ウィルトシヤはスコットランド語の *wife* (女性) (*woman*) を使い、ウマも同じ言葉を使う。順序からいえば(作品中初めて *wife* という言葉を発するのはウマである)、恐らくウィルトシヤが来島する前に島の白人等から影響を受けたといえよう。

また、一般の辞書に載っていない(常用されない)言葉も見られる。○ *ish* という言葉自体は珍しくないが、「ファレサアの浜」に常用されない ○ *ish* という言葉がよく現れる。一般的には、名詞・形容詞に付けて次の意の形容詞を作るが、が「ファレサアの浜」の場合、形容詞に接尾辞 *ish* を付け、「や・や・の」、「・・・がかった」という意味を表す。第一章「南海の婚宴」で *blind + ish* → *blindish* (眩

しがるような)、第四章「妖術」で *tight + ish* → *tightish* (困難な)、第五章「叢林の一夜」で *mean + ish* → *meanish* (少しいやし) といった使用例がある。

平野幸雄氏は「R.L. Stevenson: Island Nights' Entertainment の英語について」という論文で、ステイーブンソンの晩年の英語(『宝島』『南海千一夜物語』)を、語法並びに用語の特徴について考察している。同氏の論によれば「Phrasology」と用語において、熟語の変形したり、他の意味に用いた語句の例をあげている。一例をあげてみよう。

(前略) and as I stood there and listened to that wailing I twittered in my shoes. (四・八五頁)

立った儘、泣くような音を聞いてみると、急に身震いがしてきた。

(四・八三頁)

一般的に「びくびくする」「不安におののく」の熟語は *shiver / shake in one's shoes* と言うが、ステイーブンソンは *twitter* という言葉(この熟語を変形させる)。

そのほかに、「ファレサアの浜」にたくさんの海洋語が見られ、俗語や卑語も数多く用いられている。以上の例を見てみると、特に熟語の変形や他の意味に用いた語句の存在が、「英語も大部変つてゐる」という漱石の発言に当てはまる。「ファレサアの浜」でステイーブンソンの用いる「変わつてゐる」英語に「習ふならペランメー言葉でなぐちや可けない」という覚悟で「坊つちやん」を書き上げたのだ。榎垣実氏は、「ペランメー」という単語は、たしかに江戸ことばの代表と

いえる。江戸っ子は気が早くつて威勢がいい。それがことばの面に端的に現れるのである。ペランメーは「べらぼうめ」が早く威勢よく発音された」と指摘している。また、『日本国語大辞典』によると、「籠棒」に接尾語「め」が付いて「べらぼうめ」となり、さらに音が変化して、江戸ことばの「べらんめえ」となった、とある。作中においても、坊つちやんが「べらんめえ」の形象で作られているのが散見される。

最初のうちは、生徒も烟に捲かれてぼんやりして居たから、それ見ると益得意になつて、べらんめい調を用ゐてたら、一番前の列の真中に居た、一番強さうな奴が、いきなり起立して先生と云ふ。(三一・二七一頁)

それで送別会の席上で、大に演説でもして其行を盛にしてやりたいと思ふのだが、おれのべらんめえ調ぢや、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒肝を挫いてやろうと考へ付いたから、わざ／＼山嵐を呼んだのである。(九・三五五頁)

「べらんめえの坊つちやんた何だ」と怒鳴り付けたら「いえ君の事を云つたんぢやないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。(十一・三九七頁)

「坊つちやん」の場合は、地の文は歯切れのいい江戸弁が使われており、赴任先の住民との会話で現地の方言が見られる。しかし、主人公の坊つちやんは、当地の住民と会話するとき「ファレサアの浜」の白人のように原住民の言葉(分かりやすい言葉)にあわせずにいる。生徒に向かって、「おれは江戸っ子だから君等の言葉は使へない、分らなければ、分る迄待つてるがい」と答へてやつた。(二二・二七一頁)

と、自分の中央性を強調している。さらに坊ちやんは江戸っ子の威勢を振るつて、見栄を張ろうとする。

道中をしたら茶代をやるものだ聞いて居た。茶代をやらないと粗末に取り扱はれると聞いて居た。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない所為だらう。見すばらしい服装をして、ズツクの革靴と毛繻子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやらう。(二一・二六三頁)

江藤淳氏は前掲の論文で、「その言葉は、ほかの誰の言葉でもない漱石の生得の言葉である。つまりそれは醇乎たる江戸弁である。排他的で、リズムカルで、やや軽佻浮薄な趣きがなくもない江戸ツ子弁。」というように指摘している。また、松元季久代氏は、「坊つちやんを江戸っ子たらしめているものの最も根底にあるもの、それが江戸っ子のべらんめえ言葉だったのである。」と述べている。「ファレサアの浜」の英語(変形した熟語・海洋語・俗語・卑語など)は未開の南海のエキゾチックな雰囲気を出していたが、「坊つちやん」の「ペランメー言葉」は、江戸ツ子の坊つちやんに軽はずみで落ち着きのない主人公の独特な雰囲気を出すのである。

三一三 プロット

両作においては、「悪棍」の存在は大きなものである。「悪棍」がいなければ、主人公の正義の戦いが成立できない。漱石が『国民新聞』で「悪棍が居て色々なこともします」と発言したように、「ファレサ

アの浜」では、ケイスが悪役であり、ウマと結婚したらウィルトシヤは商売が出来ないにもかかわらず、ウマが排斥されている事実をウィルトシヤに黙って、結婚を勧めた。その他ケイスはいろいろな嘘をつき、策略を企んでウィルトシヤを困らせる。これに対し、ウィルトシヤは自分の商売のためと、迷信の原住民をケイスの妖術仕掛けから解放するために、敵を退治する手段を考える。そして、最終章において叢林に入ってケイスの仕掛けを爆薬で破壊するのである。

「坊つちやん」の場合、生徒らは坊つちやんをからかうが、「悪棍」とまではいえないだろう。いうまでもなく、赤シヤツと野だが「悪棍」である。「悪棍」は、「坊つちやん」の中では「奸物」と呼ばれ、彼らは、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略を企み、坊つちやんと山嵐を師範学校の生徒と喧嘩させ、新聞屋へ手を廻して二人に不利な記事をかかせるなど、漱石がいうように「色々なこと」もする。そして、「ファレサアの浜」と同様に、「坊つちやん」においても「悪棍」への反撃がある。つまり、最終章で野だに玉子をたたきつけ、赤シヤツに拳骨を食わして天誅を加えるのである。

三十四 人物設定

漱石の談話の中で「悪棍」に触れているが、「悪棍」と戦っている主人公については言及していない。しかしもちろん、「悪棍」に中心を置くことを漱石が考えたとはいえない。物語において「悪棍」のみの存在は、それとの対比がなければ意味がない。漱石は触れていないが、両作の主人公であるウィルトシヤと坊つちやんの間には実に様々

な共通点が見られる。まず、二人とも都会出身であり、だという設定されている。また赴任先の住民との間に軋轢や不調和が起ころ。

ウィルトシヤは、文明を象徴し、植民地領土国であるイギリス出身であり、坊つちやんは、都会の東京出身である。この都会から田舎への移動は、前者の場合は国境を越え、後者は日本国内の移動である。しかし、主人公たちの目的地、あるいは物語の舞台は、それぞれ未開の南洋の島と「大森位な漁村」、「野蛮な所」であり、都会とまったく相反するところである。

また、二人とも現地の住民を軽視する口調をしている。ウィルトシヤは、原住民を「黒奴」「馬鹿者達」「黒ツ」と呼び、「普通の島の者の迷信深さを」「十歳か十五歳位の少年」にたとえる。他方、坊つちやんは、現地の住民や生徒を「失敬な奴」「気の利かぬ田舎もの」「どうも厄介な奴等」「けちな奴等」「こんな腐った了見の奴」と称する。性格面においても、二人には共通点が見られる。「ファレサアの浜」において、ウィルトシヤはケイスによってウマと結婚させられる。その結果とんでもないことになり、宣教師タールトンに向かつてこのように言っている。

「ところが結婚してみると、妻はこの土地では排斥されている女で、これと一緒にいる間は商売が出来ない事がわかったのです。誰でもこういう立場に立った場合、もし男であったらどうするでしょうか。先ず最初にこうするだろうと思う」と言って、証書を引き裂いて床に叩きつけた。(中略)

「男であり、貴君の所謂人間らしい人間ならば、その次にはその娘を貴君なり、他の宣教師の前へ連れて来て、私はこの妻と不正な結婚をしたのですが、実は非常に愛しているので、今改めて正しく結婚したいと思

います、とこう立って言うだろうと思います。タールトン様、ではお願
いします。島の言葉でやって戴く方がいいです。その方が妻の気に入
りますから」と、ウマを早速妻と呼んで言った。(「ファ」三・六〇頁)

ウマのせいで商売がうまくいかないなか、妻と商売との間でどちら
を選択すべきなのか。「ここへ取引きに来ている者」であるなら、ど
うせ不正な結婚であつたし、また、結婚証書にも「該ジョン・ウイル
トシャ氏はいつ何時たりともウマを遺棄する自由を有する。」(英語の
原文では「遺棄」という言葉でなく、「娘を地獄へ送る自由を有する」
という強い表現が使われている)のように、いつでも妻を遺棄する自
由があるので、商売の方を選ぶはずである。しかし、ウマとこのまま
結婚していたら商売にならないことを覚悟した上で、ウイルトシャは
男としての責任を果たすために、愛する彼女と正式に結婚することを
欲する。ウイルトシャは、利益ではなく、自分に対して不利な立場を
あえて選ぶ正義感の強い男なのだ。また、ケイスを刺す場面において、
ウイルトシャ自分自身は一面識もないにもかかわらず、ケイスに被害
を受けたアンダヒル、アダムズの代わりに復讐するように、「満身の
力を籠めて冷たい刃」でケイスを「突き刺し通した」のである。

「さあ、とっ掴まえたぞ。もうおしまいだ、貴様も貴様の旨い事も。ど
うだ、この刃先きがわかるか。アンダヒルのためだ。アダムズのためだ。
さあこれはウマのためだ。この一刺しで止めを刺してやるぞ」そう言っ
て満身の力を籠めて冷たい刃を突き刺し通した。(「ファ」五・一〇五頁)

利益と不利との間で選択させられたとき、正義感に燃える主人公が
利益を捨て、「ばかげた」選択肢を選ぶのは、「坊つちやん」にも見ら

れる。坊つちやんは赤シャツに提案された増給を断るうとして、夕食
を運んできた婆さんに説教される。

「先生は月給が御上りるのかなもし」(婆)

「上げてやるつて云ふから、断はらうと思ふんです」(坊)

「何で、御断はりのぞなもし」(婆)

「何でも御断はりだ。御婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。卑怯でさ

あ」(坊)

(中略)

「年寄の癖に余計な世話を焼かなくつてもいゝ。おれの月給は上がらう
と下がらうとおれの月給だ」(坊)

(「坊」一八・三四八頁)

増給を断ることだけでなく、坊つちやんはさらに校長の狸に辞表を
出したい旨を伝える。

「それちや私も辞表を出しませう。堀田君一人辞職させて、私が安閑と
して、留まつて居られると思つて入らつしやるかも知れないが、私には
そんな不人情な事は出来ません」(坊)

(中略)

「君さう我儘を云ふものぢやない、少しは学校の事情も察して呉れなく
ちや困る。夫れに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云ふと、
君の将来の履歴に係るから、其辺も少しは考へたらいでせう」(狸)

「履歴なんか構ふもんですか、履歴より義理が大切です」(坊)

(「坊」一一・三八九―三九〇頁)

ウイルトシャも坊ちやんも正義感が強く、両作において主人公の性
格面は近似している。彼らは決して自分の利益を追い求めることなく、
義理や正義の立場をしっかりと守って、不正と対峙するのである。

おわりに

実体験から得た構想によって書かれた「坊つちやん」だが、その構想・物語の構成などの問題においては、『南海千一夜物語』中の「ファレサアの浜」との関係も無視しがたい。『国民新聞』で漱石自身が発言した「第一人称で書て英語も大部変つてゐる、此に習ふならペラシメー言葉でなくちや可けない、悪棍が居て色々なこととします」といった条件が「坊つちやん」にも見られる。さらに、主人公の出身・物語の舞台、人物の造型や性格まで似ている。この二つの東西の物語は一見方向がまったく違うが、作中の共通点は明らかである。まさに「其のマア調子ですね、調子を学んだといへば言ふんです」のように、西洋の作家で一番好きなステイーブンソンから「調子」を学んだのである。

ステイーブンソンからの影響は、「坊つちやん」だけにとどまらず、のちの「彼岸過迄」にもその影が見られる。本論においては、漱石の『国民新聞』での発言を踏まえながら、彼が一番愛読したステイーブンソンの作品とのかかわり・共通点に注目してきたが、「坊つちやん」と「ファレサアの浜」との関係について、さらに考察すべき課題がまだ残っている。それぞれの主人公の現地への視点、主人公以外の人物造型、侵略者の姿やオリエンタリズムなどの視点にも注意を払いながら、両作の異同や分析を別論で行いたい。

注 (1) 小宮豊隆『漱石の芸術』一九四二年十二月 岩波書店

(2) 管見では、「坊つちやん」と外国文学とのかかわりに関する先行論には、以下の論考がある。

※無署名『坊つちやん』物語』『文章世界』第一卷一〇〇号 一九〇六年十二月(アルフランス・ドレー『ちび』)

※板垣直子「坊つちやん」(構造における「ディケンズ」の「デーヴィット・カッパーフィールド」型について)『漱石文学の背景』一九八四年 日本図書センター(初出：一九五六年)『ディケンズ』『ディヴィッド・コッパフィールド』

※松村昌家『坊つちやん』とNicholas Nickleby』『言語と文体』一九七四年十月 大阪教育図書(ディケンズ『ニコラス・ニッケルビー』)

※HOMMA, Kenshiro 1997. *Natsume Soseki and English Literature — Borchan and The Merchant of Venice. The Journal of Intercultural Studies No.24, Kansai Gaidai University Publication* (シニクスピア『ヴェニス商人』)

※ERICKSON, Robert 2000. *Charlotte Brontë's The Professor and Natsume Soseki's Borchan: Alienated Lovers, Reluctant Teachers, and Unsung Heroines. Bulletin of the College of Foreign Studies, Yokohama, Vol.22.* (シヤールロット・ブロンテ『教授』)

※飛ヶ谷美穂子「諧謔の構造——『サンドラ・ベロニ』と『坊つちやん』『漱石の源泉——創造への階梯』二〇〇二年十月 慶應義塾大学出版会(メレディス『サンドラ・ベロニ』)

(3) ハハ、別に工夫も有ません、と今点つた計りの玉火屋に面を向ひて軽く笑つた、彼は猫以来俄に売出して常時文壇の時花子漱石夏目文士である、小男で色艶く、真白な浴衣から出した面は寧ろ瘦せて居る、豫期したよりも覇気が見へず思つたよりも年が老つて居る音声は甚低い萬づ謙遜の態度

チッケンス(西洋語を言ふ時は殊に低くて聞取れぬ位)を何様したとかいふ人も有ますが、其様な訳でも有ません、文章に滑稽趣味があるなら、其は性分ですね、私の性分がまア其様なんでせう、尤も若い時——十歳代に落語が嗜で能く聞きに行きました、分りもしなかつたの

ですがね

(この括弧内の文章は本文を参照)

モデル?ありません、松山に行て居たことは有ますが文学士は私一人でしたからね、赤襦衣が如何だといふ人も有ますが、其では自分を書いた事になつて了ふ、尤も道具屋の二階を借りて居たのと温泉に行つた事は有るです、然しローカル、カラ——土地の景色は致し方がない、此は写生でなければ甘く行かないから

以上は他行かゝつて居る文学士を引止めて聞き得た極短かい時間の談話である、辞し去る時に彼は台洋灯を掴んで玄間まで見送くり、玉火屋と障子の間から首を出し、此の近所に住ますか、イエ赤坂ですと答へると、御苦労でしたねといつた言葉は暖か、つた(家巢生)

- (4) 大屋幸世「坊つちやん」の著者——当時の新聞記事から——『図書』一九七一年十一月 岩波書店

- (5) 伊藤整 荒正人編『漱石研究年表』(『漱石文学全集』別巻) 一九七四年十月 集英社

- (6) 荒正人『漱石研究年表 増補改訂』一九八四年六月 集英社

- (7) G.B.スタン『ステイーヴンソン』英文学ハンドブック——「作家と作品」No.22 日高八郎訳 一九五六年十一月 研究社

- (8) STEVENSON, R.L. "New Arabian Nights" 「作者小伝」(改訂: 福原麟太郎) 一九四七年四 研究社

(9) 夏目漱石「予の愛読書」『漱石全集』第二十五卷 一九九六年五月岩波書店(初出: 一九〇六年一月一日『中央公論』第二十一号) 西洋ではステヴンソン(Stevenson)の文が一番好きだ。力があつて、簡潔で、クドクしい処がない、女々しい処がない。ステヴンソンの文を読むとハキ／＼してよい心持だ。話も余り長いのがなく、先づ短篇といふてよい。句も短い。殊に晩年の作がよいと思ふ。Master of Ballantrae などは文章が実に面白い。(後略)

- (10) 小玉晃一『比較文学の周辺』一九七三年七月 笠間書院

- (11) 鶴見祐輔『壇上・紙上・街上の人』三二一 一高の夏目先生 一九二六年十一月 講談社

※鶴見祐輔氏は、一九〇六年一高の思い出をその二十年後(一九二六年)に語っているが、長い年月の隔たりのためか、教箇所が曖昧

である。

① 当時(一九〇六年)「坊つちやん」を掲載されたのは、『中央公論』でなく、『ホトトギス』である。「坊つちやん」を収録する初刊本・再刊本にしても、出版社はそれぞれ春陽堂(一九〇七・一九一三・一九一四年)、新潮社(一九一四年)である。

② 「坊つちやん」において「卵合戦」が見えるが、「ゼ・アイランド・ナイト・エンターテインメント」の三篇には見られない。

- (12) 小宮豊隆 他「夏目漱石を語る(座談会)」『心』八十号 一九五五年六月 平凡社

- (13) 江藤淳「坊つちやん」について(新潮文庫『坊つちやん』解説) 一九九八年五月 新潮社

(14) 例えば、「ファレサアの浜」第四章(英文七四頁、和文七三頁)。ウルトシヤが男性の島民に道を尋ねる場面。道を指す代名詞 "It" が使われておらず、ほかの文法の間違ひも見られる。

I asked him if there was no road going eastward.
"One time one road," said he. "Now he dead."

"Nobody he go there?" I asked.
"No good," said he. "Too much devil he stop there."

"Ohoi!" says I, "got-um plenty devil, that bush?"
"Man devil, woman devil, too much devil," said my friend. "Stop there all-e-time. Man he go there, no come back."

(15) ※ sr, obstreperous の発音は CROWTHER, Jonathan, ed., "Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English", Fifth edition, Oxford University Press, 1995 による。

※ sah, obstropulous 発音は『ジーニアス英和大辞典』小西友七・南出康世編集 二〇〇一〜二年 大修館による。

- (16) 『ジーニアス英和大辞典』小西友七・南出康世編集 二〇〇一〜二年 大修館

- (17) 平野幸雄「R.L. Stevenson: Island Nights' Entertainment の英語について」愛知女子短大紀要 第八輯 一九五七年十二月

- (18) 榎垣実「べらんめえとそうどすか——江戸ことばと上方ことば——」『国文学解釈と鑑賞』第二十八巻十五号 一九六三年十一月 至文堂

- (19) 『日本国語大辞典』第二版 十二卷 二〇〇一年十一月 小学館
(20) 松元季久代『「坊っちゃん」と標準語雄弁術の時代―内向する「べらんめえ」―』『漱石研究』十二号 一九九九年十月 翰林書房

【付記】

※「坊っちゃん」のテキストは『漱石全集』第二卷（一九九四年一月 岩波書店）を使用した。

※「ファレサアの浜」の英語テキストは“The Beach of Falesa” (Stevenson, Robert Louis, Melville House Publishing, 2005)を使用した。(初出: STEVENSON, R.L., “Island Nights’ Entertainments” London: Cassell; New York: Scribners, 1893)

※「ファレサアの浜」の日本語訳は『南海千一夜物語』（中村徳三郎訳 一九五〇年二月 岩波書店）を使用した。

※傍線は私に付した。

(れおん・ゆつと・もい、広島大学大学院博士課程後期在学)